

金沢スイーツセミナー3

診断に苦慮した症例の細胞を見てみよう

鳩宿 敏彦¹, 稲田 孝², 中西 加代子³

¹大阪医療技術学園専門学校

²JCHO 京都鞍馬口医療センター

³京都大学医学部附属病院

血液形態検査は、造血器疾患を診断するうえで大変優れた検査法の一つである。一枚の標本からは、様々な情報が得られその臨床的価値も高い。しかし、末梢血や骨髄標本に腫瘍細胞が出現しているかどうかを正確に判断するには、高い知識と熟練が必要となる。さらに、形態学はどちらかと言えば主観的であり、なぜそう判定できるのかを完全に客観的に示すことは難しい。しかし、形態学的異常を有する細胞の形、大きさ、色などの特徴をより定量的に捉えることで、客観性を高めることが可能となり、誰にでも判定可能な判断基準を持たせることが出来る。今回、セラビジョン DC-1 で撮影した細胞画像を用いて、標本観察のポイント、異常細胞の見方・考え方、疾患へのアプローチの方法などを形態エキスパートのコメンテーターによりディスカッション形式で解説する。